カリフォルニア大学デービス校 滞在記

お茶の水女子大学 理学部情報科学科
伊藤 貴之

1. カリフォルニア大学デービス校での研修

筆者は2008年9～10月の7週間，勤務先大学のFaculty Development に関する取り組みの一環で，カリフォルニア大学デービス校に滞在した．デービス校では研究プロジェクトに所属するとともに，デービス校の教育研究システムに関して現地教職員からのヒアリングを実施した．

研究プロジェクトでは実質5週間で新規研究プロジェクトを立ち上げ，滞在期間中に論文を書き上げ，難関国際会議（IEEE Pacific Visualization Symposium）のフルペーパー採録を達成した．また滞在の最終週には勤務先大学の研究指導学生2名がカリフォルニア大学を訪問し，翌週に開催される国際会議（IEEE VisWeek）でのポスター発表の練習を実施した．現地での発表練習が実を結び，学生のうち1名はBest Poster Nominee賞を受賞した．

現地教職員からのヒアリングでは，いままで個人的に漠然と聞いたことのある日米の大学の違いを，衝撃的なまでに実感する機会となった．主に印象に残った点は以下の通りである．

- 授業評価アンケートは厳格に分析される．評価の悪い教員には，給与が下がる，研修を受けさせられる，講義内容を再考させられる，などのアクションが生じる．
- 研究室の配属人数や占有面積は，主に獲得資金で決まる．獲得資金が全くないと，学生を他研究室に強制的に移されることもある．
- インターンシップの募集では学部生に対しても専門性が厳しく要求されるため，学部生は熱心に専門科目を勉強する．その熱心さが業界の技術力に直結している．
- 博士後期課程を修了すれば生涯賃金が高くなるので，学生は博士号取得に熱心になる．ただしそのぶん研究職のポストが多いわけではなく，最初から研究職以外の職種に就くつもりで博士後期課程に進学する学生も多い．

要するに，社会は真剣に学生の専門性を要求し，学生は専門性をつけるために教員に対して価値ある講義を要求し，大学は経営のために教員の研究成果を厳格に要求する，というシビアなシステムが構築されていて，それがアメリカ社会の強さを支えている，ということであろう．

以上の研修内容については，筆者のウェブページ（http://itolab.is.ocha.ac.jp/~itot/davis/）に詳しく説明されている．また，2009年度画像電子学会VCワークショップでの発表資料（http://itolab.is.ocha.ac.jp/~itot/paper/ItotSTJ12.pdf）にも詳しく説明されている．興味のある方はご一読いただきたい．

まじめな話はこれくらいにして，次章以降では，筆者の2ヶ月弱の日常生活で印象に残ったことを中心に紹介したい．

2. デービス校周辺での生活

筆者はデービス校滞在中，主としてキャンパス内の短期用アパートに居住し，自転車で5分くらいの場所にある研究室に通っていた．筆者の滞在中の1日のスケジュールを図1に示す．

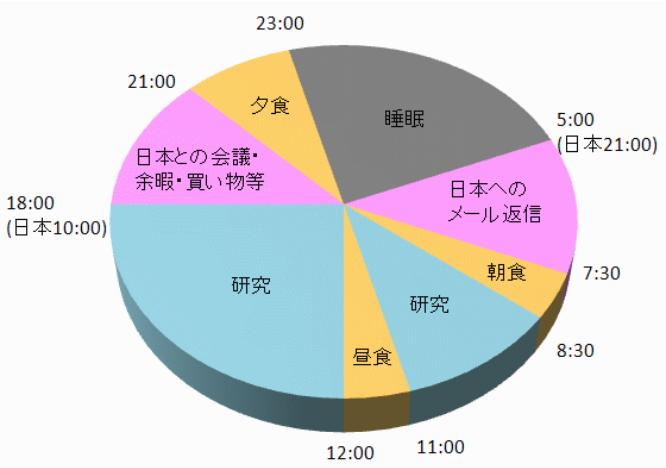

図1　デービス校滞在中のスケジュール．

滞在中も日本の学内業務・学会業務を担当し，当時15人の研究室学生の指導も絶やさなかった．朝は毎日，日本へのメールの返信に明け暮れた．夕方は週1,2回ほど，研究室学生とのSkype会議を開いた．それ以外の日の夕方は，スーパーマーケットへの食材等の買い物，または近場で軽いスポーツ（テニス，ボウリング，フリスビー）に興じた．

デービス校は農学部が有名な大学で，そのせいかスーパーマーケットの食物の品揃えは素晴らしく，特に野菜は東京の自宅周辺で買うより間違いなく美味しい．またチーズ，オリーブ，ワインなどの種類がとても豊富で，毎日の食卓が飽きない．主食もパン・パスタのみならず，美味しい米が1kg単位で手に入る．これなら自炊も楽しいものである．

健康を支える環境も万全である．キャンパス内にはフリスビーなどで遊ぶに十分たる敷地があり，ボウリング場もキャンパ

ス内にある．近所には無料のテニスコートが揃っている．ウォーキングコースも完備されていて，多くの市民が走ったり歩いたりしている．

これらの環境のせいか，この街を歩く市民はとても健康的に見える．どうもアメリカ人というと，カロリー摂取量が多くて恰幅のいい体型，という偏見が頭をよぎりがちだが，この街を歩く人達は総じて，スラッとした体型で，動きもキビキビして見える．筆者は今まで，東京に住む人達はアメリカ人より健康的と信じてきたが，デービス校周辺の人達より健康かと問われると自信がない．この経験を通して筆者は学生達に対して，研究室に配属になったら研究に専念しろというより，むしろサークルなどの活動を続けて健康を維持しながら研究をしろ，と言うべきであろうという感想を強く持った．

3. 週末の観光

7週間の滞在中，金曜日の夕方にレンタカーを（当然自費で）借りて，週末は観光に出かけ，月曜日の朝にレンタカーを返して仕事に向かう，というサイクルを繰り返した．主な訪問先として，ヨセミテ国立公園（図2）とクレイターレイク国立公園（図3）の写真を示す．

これらの訪問先では，多くのアメリカ人の典型的な休日を過ごしてきた．山や湖を見て，ぼーっとしながら会話を交わす．ちょっと運転して別の駐車場に移動して，また別の角度から山や湖を見て，ぼーっとしながら会話を交わす．何箇所かトレイルをのんびり歩く．それだけである．でもそれが，多くのアメリカ人にとって贅沢な休日の過ごし方であり，仕事に集中するための気分転換として絶好の方法らしい．我々日本人は，1年間に何回くらい，ちゃんと気分転換できる機会を持っているだろう．これも考えさせられる機会となった．それと同時に筆者は研究室学生の上司として，気分転換のための学生の休暇を暖かく奨励すべき，ということを再確認した．（もっとも拙研究室では実際には，教員たる筆者が最も率先して休暇をとっているようだが…．）

筆者は学生時代，イタリア・フィレンツェのトラットリアで，隣に座ったアメリカ人老夫婦と意気投合して，ワインを酌み交わしたことがある．そのとき老夫婦は，こんなことを言っていた．18年が過ぎた現在でも，鮮明に覚えている．

> 「ニューヨークやロサンゼルスのような大都会は，本当のアメリカではない．その間にある大自然こそ，本当のアメリカだ．」

筆者はそれから長い月日をかけて，今回の訪問を含めて何度かのアメリカ観光旅行により，その言葉の意味を確認している．偶然にも会話を交わした老夫婦の一言は，筆者に一生の宝となる思い出をもたらした，とても重みのある一言である．

図2　ヨセミテ国立公園の写真．

図3　クレイターレイク国立公園の写真．

伊藤貴之

1990年早稲田大学理工学部電子通信学科卒業．1992年早稲田大学大学院理工学研究科電気工学専攻修士課程修了．同年日本アイ・ビー・エム(株)入社．1997年博士(工学)．2000年米国カーネギーメロン大学客員研究員．2003年から2005年まで京都大学大学院情報学研究科COE研究員(客員助教授相当)．2005年日本アイ・ビー・エム(株)退職，2005年よりお茶の水女子大学理学部情報科学科助教授（現在准教授）．ACM, IEEE Computer Society, 他会員．